

恩讐の彼方に

菊池寛

青空文庫

市九郎いちろうは、主人の切り込んで来る太刀を受け損じて、左の頬から顎へかけて、微傷ではあるが、一太刀受けた。自分の罪を——たとえ向うから挑まれたとはいえ、主人の寵妾と非道な恋をしたという、自分の致命的な罪を、意識している市九郎は、主人の振り上げた太刀を、必至な刑罰として、たとえその切先を避くるに努むるまでも、それに反抗する心持は、少しも持つてはいなかった。彼は、ただこうした自分の迷いから、命を捨てることが、いかに惜しまれたので、できるだけは逃れてみたいと思つていた。

それで、主人から不義をいい立てられて切りつけられた時、あり合せた燭台を、早速の獲物として主人の鋭い太刀先を避けていた。が、五十に近いとはいえ、まだ筋骨のたくましい主人が畳みかけて切り込む太刀を、攻撃に出られない悲しさには、いつとなく受け損じて、最初の一太刀を、左の頬に受けたのである。が、一旦血を見ると、市九郎の心は、たちまちに變つていた。彼の分別のあつた心は、鬪牛者の槍を受けた牡牛のように荒んでしまった。どうせ死ぬのだと思うと、そこに世間もなければ主従もなかった。今までは、主人だと思つていた相手の男が、ただ自分の生命を、脅おどそうとしている一個の動物——それも凶悪な動物としか、見えなかつた。彼は奮然として、攻撃に転じた。彼は「おうお」と叫おめ

きながら、持っていた燭台を、相手の面上を目がけて投げ打った。市九郎が、防御のための防御をしているのを見て、気を許してかかっていた主人の三郎兵衛は、不意に投げつけられた燭台を受けかねて、その蠟受けの一角がしたたかに彼の右眼を打った。市九郎は、相手のたじろぐ隙に、脇差を抜くより早く飛びかかった。

「おのれ、手向いするか！」と、三郎兵衛は激怒した。市九郎は無言で付け入った。主人の三尺に近い太刀と、市九郎の短い脇差とが、二、三度激しく打ち合うた。

主従が必死になって、十数合太刀を合わす間に、主人の太刀先が、二、三度低い天井をかすって、しばしば太刀を操る自由を失おうとした。市九郎はそこへ付け入った。主人は、その不利に気

がつくと、自由な戸外へ出ようとして、二、三步後あとずさ退りして縁の外へ出た。その隙に市九郎が、なおも付け入ろうとするのを、主人は「えい」と、苛だつて切り下した。が、苛だつたあまりその太刀は、縁側と、座敷との間に垂れ下っている鴨居に、不覚にも二、三寸切り込まれた。

「しまった」と、三郎兵衛が太刀を引こうとする隙に、市九郎は踏み込んで、主人の脇腹を思うさま横に薙ないだのであつた。

敵手あいてが倒れてしまった瞬間に、市九郎は我にかへつた。今まで興奮して朦朧としていた意識が、ようやく落着くと、彼は、自分が主殺しの大罪を犯したことに気がついて、後悔と恐怖とのために、そこにへたばつてしまった。

夜は初更を過ぎていた。母屋おもやと、仲間部屋とは、遠く隔っている。主従の恐ろしい格闘は、母屋に住んでいる女中以外、まだだれにも知られなかつたらしい。その女中たちは、この激しい格闘に氣を失い、一間のうちに集つて、ただ身を震わせているだけであつた。

市九郎は、深い悔恨にとらわれていた。一個の蕩児であり、無頼の若武士ではあつたけれども、まだ悪事と名の付くことは、何もしていなかつた。まして八逆の第一なる主殺しの大罪を犯さうとは、彼の思いも付かぬことだつた。彼は、血の付いた脇差を取り直した。主人の妾と慇懃を通じて、そのために成敗を受けようとした時、かえつてその主人を殺すということは、どう考えても、

彼にいいところはなかつた。彼は、まだびくびくと動いている主人の死体を尻眼にかけながら、静かに自殺の覚悟を固めていた。するとその時、次の間から、今までの大きい圧迫から逃れ出たよな声がした。

「ほんとにまあ、どうなることかと思つて心配したわ。お前がまつ二つにやられた後は、私の番じゃあるまいかと、さつきから、屏びようぶ風ふうの後で息を凝らして見ていたのさ。が、ほんとうにいい塩あ梅んばいだつたね。こうなつちや、一刻ときも猶予はしていられないから、有り金をさらつて逃げるとしよう。まだ仲間たちは気がついていないようだから、逃げるなら今のうちさ。乳母や女中などは、台所の方でがたがた震えているらしいから、私が行つて、じたばた

騒がないようにいつてこようよ。さあ！ お前は有り金を探して下さいよ」というその声は、確かに震えを帯びていた。が、そうした震えを、女性としての強い意地で抑制して、努めて平気を装っているらしかった。

市九郎は——自分特有の動機を、すっかり失くしていた市九郎は、女の声をきくと、よみがえ蘇つたように活気づいた。彼は、自分の意志で働くというよりも、女の意志によつて働くかいらい傀儡のように立ち上ると、座敷に置いてある桐の茶筆筒に手をかけた。そして、その真白い木目に、血に汚れた手形を付けながら、引出しをあちらこちらと探し始めた。が、女——主人の妾のお弓が帰ってくるまでに、市九郎は、二朱銀の五両包をただ一つ見つけたばかりで

あつた。お弓は、台所から引つ返してきて、その金を見ると、

「そんな端はしたがね金が、どうなるものかね」と、いいながら、今度

は自分で、やけに引出しを引掻き回した。しまいにはよろいびつ鎧櫃の中まで探したが、小判は一枚も出てきはしなかつた。

「名うての始末屋だから、瓶かめにでも入れて、土の中へでも埋めてあるのかも知れない」そう忌々いまいましそうにいい切ると、金目のありそうな衣類や、印籠を、手早く風呂敷包にした。

こうして、この姦夫姦婦かんぶかんぶが、浅草田原町の旗本、中川三郎兵衛の家を出たのは、安永あんえい三年の秋の初めであつた。後には、当年三歳になる三郎兵衛の一子実之助が、父の非業の死も知らず、乳母の懐ろにすやすや眠っているばかりであつた。

市九郎とお弓は、江戸を逐電してから、東海道はわざと避けて、人目を忍びながら、東山道とうさんどうを上方へと志した。市九郎は、主殺しの罪から、絶えず良心の苛責を受けていた。が、けんぺき茶屋の女中上がりの、莫連者ばくれんもののお弓は、市九郎が少しでも沈んだ様子を見せると、

「どうせ凶状持ちになつたからには、いくらよくよしてもしようがないじゃないか。度胸を据えて世の中を面白く暮すのが上分別さ」と、市九郎の心に、明け暮れ悪の拍車を加えた。が、信州

から木曾の藪原やぶはらの宿まで来た時には、二人の路用の金は、百も残つていかなかった。二人は、窮するにつれて、悪事を働かねばならなかった。最初はこうした男女の組合せとしては、最もなしやすい美人局つつもたせを稼業とした。そうして信州から尾州へかけての宿々で、往来の町人百姓の路用の金を奪っていた。初めのほどは、女からの激しい教唆きようさで、つい悪事を犯し始めていた市九郎も、ついには悪事の面白さを味わい始めた。浪人姿をした市九郎に対して、被害者の町人や百姓は、金を取られながら、すこぶる柔順であつた。

悪事がだんだん進歩していった市九郎は、美人局からもつと單純な、手数ゆすりのいらぬ強請をやり、最後には、切取強盗を正当な稼

業とさえ心得るようになった。

彼は、いつとなしに信濃から木曾へかかる鳥居峠とりいとうげに土着した。そして昼は茶店を開き、夜は強盗を働いた。

彼はもうそうした生活に、なんの躊躇をも、不安をも感じないようになつていた。金のありそうな旅人を狙つて、殺すと巧みにその死体を片づけた。一年に三、四度、そうした罪を犯すと、彼は優に一年の生活を支えることができた。

それは、彼らが江戸を出てから、三年目になる春の頃であつた。参勤交代の北国大名の行列が、二つばかり続いて通つたため、木曾街道の宿々は、近頃になく賑わつた。ことにこの頃は、信州を始め、越後や越中からの伊勢参宮の客が街道に続いた。その中に

は、京から大坂へと、遊山の旅を延すのが多かった。市九郎は、彼らの二、三人をたおして、その年の生活費を得たいと思つてゐた。木曾街道にも、杉や檜に交つて咲いた山桜が散り始める夕暮のことであつた。市九郎の店に男女二人の旅人が立ち寄つた。それは明らかに夫婦であつた。男は三十を越してゐた。女は二十三、四であつただろう。供を連れないう気楽な旅に出た信州の豪農の若夫婦らしかつた。

市九郎は、二人の身形みなりを見ると、彼はこの二人を今年の犠牲者にしようかと、思つてゐた。

「もう藪原の宿まで、いくらもあるまいな」

こういいながら、男の方は、市九郎の店の前で、草鞋わらじの紐を結

び直そうとした。市九郎が、返事をしようとする前に、お弓が、台所から出てきながら、

「さようでございます、もうこの峠を降りますれば半道もござい
ません。まあ、ゆつくり休んでからになさいませ」と、いった。

市九郎は、お弓のこの言葉を聞くと、お弓がすでに恐ろしい計画
を、自分に勧めようとしているのを覚えた。藪原の宿までにはま
だ二里に余る道を、もう何ほどもないようにいいくるめて、旅人
に気をゆるさせ、彼らの行程が夜に入るのに乗じて、間道を走っ
て、宿の入口で襲うのが、市九郎の常套の手段であつた。その男
は、お弓の言葉をきくと、

「それならば、茶など一杯所望しようか」といいながら、もう彼

らの第一の罨に陥つてしまった。女は赤い紐のついた旅の菅笠すげがさを取りはずしながら、夫のそばに寄り添うて、腰をかけた。

彼らは、ここで小半刻も、峠を登り切つた疲れを休めると、鳥ち

ようもく

目を置いて、紫に暮れかかっている小木曾おぎその谷に向つて、鳥

居峠を降りていった。

二人の姿が見えなくなると、お弓は、それとばかり合図をした。市九郎は、獲物を追う獵師のように、脇差を腰にすると、一散に二人の後を追うた。本街道を右に折れて、木曾川の流れに沿うて、険しい間道を急いだ。

市九郎が、藪原の宿手前の並木道に來た時は、春の長い日がま
つたく暮れて、十日ばかりの月が木曾の山の彼方に登ろうとして、

ほの白い月しろのみが、木曾の山々を微かに浮ばせていた。

市九郎は、街道に沿うて生えている、一叢むらの丸葉柳の下に身を隠しながら、夫婦の近づくのを、徐おもむろに待っていた。彼も心の底では、幸福な旅をしている二人の男女の生命を、不当に奪うということが、どんなに罪深いかということ、考えずにはいかなかった。が、一旦なしかかった仕事を中止して帰ることは、お弓の手前、彼の心にまかせぬことであつた。

彼は、この夫婦の血を流したくはなかつた。なるべく相手が、自分の脅迫に二言もなく服従してくればいいと、思っていた。もし彼らが路用の金と衣装とを出すなら、決して殺生はしまいと、思っていた。

彼の決心がようやく固まった頃に、街道の彼方から、急ぎ足に近づいてくる男女の姿が見えた。

二人は、峠からの道が、覚悟のほかに遠かったため、疲れ切つたと見え、お互いに助け合いながら、無言のままに急いで来た。

二人が、丸葉柳の茂みに近づくと、市九郎は、不意に街道の真ん中に突つ立つた。そして、今までに幾度も口にし馴れている脅迫の言葉を浴せかけた。すると、男は必死になつたらしく、道中差を抜くと、妻を後に庇かばいながら身構えした。市九郎は、ちよつと出鼻を折られた。が、彼は声を励まして、「いやさ、旅の人、手向いしてあたら命を落すまいぞ。命までは取ろうといわぬのじや。有り金と衣類とをおとなしく出して行け！」と、叫んだ。そ

の顔を、相手の男は、じいつと見ていたが、

「やあ！ 先程の峠の茶屋の主人ではないか」と、その男は、必死になつて飛びかかつてきた。市九郎は、もうこれまでと思つた。自分の顔を見覚えられた以上、自分たちの安全のため、もうこの男女を生かすことはできないと思つた。

相手が必死に切り込むのを、巧みに引きはずしながら、一刀を相手の首筋に浴びせた。見ると連れの女は、氣を失つたように道の傍にうずくま蹲りながら、ぶるぶると震えていた。

市九郎は、女を殺すに忍びなかつた。が、彼は自分の危急には代えられぬと思つた。男の方を殺して殺氣立っている間にと思つて、血刀を振りかざしながら、彼は女に近づいた。女は、両手を

合わして、市九郎に命を乞うた。市九郎は、その瞳に見つめられると、どうしても刀を下ろせなかつた。が、彼は殺さねばならぬと思つた。この時市九郎の欲心は、この女を切つて女の衣装を台なしにしてはつまらないと思つた。そう思うと、彼は腰に下げていた手拭をはずして女の首を絞くつた。

市九郎は、二人を殺してしまうと、急に人を殺した恐怖を感じて、一刻もいたたまらないように思つた。彼は、二人の胴巻と衣類とを奪うと、あたふたとしてその場から一散に逃れた。彼は、今まで十人に余る人殺しをしたものの、それは半白の老人とか、商人とか、そうした階級の者ばかりで、若々しい夫婦づれを二人まで自分の手にかけてことはなかつた。

彼は、深い良心の苛責かしやくにとらわれながら、帰つてきた。そして家に入ると、すぐさま、男女の衣装と金とを、汚らわしいもののように、お弓の方へ投げやった。女は、悠然としてまず金の方を調べてみた。金は思ったより少なく、二十両をわずかに越しているばかりであつた。

お弓は殺された女の着物を手に取ると、「まあ、黄八丈の着物に紋縮緬もんちりめんの襦袢だね。だが、お前さん、この女の頭かぶりのものは、どうおしだい」と、彼女は詰問するように、市九郎を顧みかえりた。

「頭のもの！」と、市九郎は半ば返事をした。

「そうだよ。頭かぶりのものだよ。黄八丈に紋縮緬の着付じや、頭かぶりのも
のだって、擬物まがいものの櫛くしや笄こうがいじやあるまいじやないか。わたしは、

さつきあの女が菅笠を取った時に、ちらと睨んでおいたのさ。瑠たま瑠いまいの揃いに相違なかつたよ」と、お弓はのしかかるようにいつた。殺した女の頭のものごとなどは、夢にも思っていないなかつた。市九郎は、なんとも答えるすべがなかつた。

「お前さん！　まさか、取るのを忘れたのじやあるまいね。瑠瑠だとすれば、七両や八両は確かだよ。駆け出しの泥棒じやあるまいし、なんのために殺生をするのだよ。あれだけの衣装を着た女を、殺しておきながら、頭のものに気がつかないとは、お前は、いつから泥棒稼業におなりなのだえ。なんというどじをやる泥棒だろう。なんとか、いつてごらん！」と、お弓は、威たけ高になつて、市九郎に食つてかかつてきた。

二人の若い男女を殺してしまつた悔いに、心の底まで冒おかされかけていた市九郎は、女の言葉から深く傷つけられた。彼は頭のものを取ることを、忘れたという盗賊としての失策を、或いは無能を、悔ゆる心は少しもなかつた。自分は、二人を殺したことを、悪いことと思えばこそ、殺すことに気も転動して、女がその頭に十両にも近い装飾を付けていることをまつたく忘れていた。市九郎は、今でも忘れていたことを後悔する心は起らなかつた。強盗に身を落して、利欲のために人を殺しているものの、悪鬼のように相手の骨まではしやぶらなかつたことを考えると、市九郎は悪い気持はしなかつた。それにもかかわらず、お弓は自分の同性が無残にも殺されて、その身に付けた下衣したぎまでが、殺戮者さつりくしゃに対す

る貢物として、自分の目の前に晒さらされているのを見ながら、なおその飽き足らない欲心は、さすが悪人の市九郎の目をこぼれた頭のものにまで及んでいる、そう考えると、市九郎はお弓に対して、いたたまらないような浅ましさを感じた。

お弓は、市九郎の心に、こうした激変が起っているのをまったく知らないで、

「さあ！ お前さん！ 一走り行っておくれ。せつかく、こっちの手に入っているものを遠慮するには、当らないじゃないか」と、自分の言い分に十分な条理があることを信ずるように、勝ち誇つた表情をした。

が、市九郎は黙々として応じなかった。

「おや！ お前さんの仕事のあらを拾ったので、お気に触ったと見えるね。本当に、お前さんは行く気はないのかい。十両に近いもうけものを、みすみすふいにしてしまうつもりかい」と、お弓は幾度も市九郎に迫った。

いつもは、お弓のいうことを、唯々^{いい}としてきく市九郎ではあったが、今彼の心は激しい動乱の中にあつて、お弓の言葉などは耳に入らないほど、考え込んでいたのである。

「いくらいつても、行かないのだね。それじゃ、私が一走り行ってこようよ。場所はどこのの。やっぱりいつものところなのかい」と、お弓がいった。

お弓に対して、抑えがたい嫌悪を感じ始めていた市九郎は、お

弓が一刻でも自分のそばにいなくなることを、むしろ欣よろこんだ。

「知れたことよ。いつもの通り、藪原の宿の手前の松並木さ」と、市九郎は吐き出すようにいった。「じゃ、一走り行ってくるから。幸い月の夜でそとは明るいし……。ほんとうに、へまな仕事をするつたら、ありやしない」と、いいながら、お弓は裾をはしよつて、草履をつつかけると駆け出した。

市九郎は、お弓の後姿を見ていると、浅ましきで、心がいつぱいになってきた。死人の髪のを剥ぐために、血眼になって駆け出していく女の姿を見ると、市九郎はその女に、かつて愛情を保持っていただけに、心の底から浅ましく思わずにはいられなかつた。その上、自分が悪事をしている時、たとい無残にも人を殺し

ている時でも、金を盗んでいる時でも、自分がしているというところが、常に不思議な言い訳になって、その浅ましさを感ずることが少なかつたが、一旦人が悪事をなしているのを、静かに傍観するとなると、その恐ろしさ、浅ましさが、あくまで明らかに、市九郎の目に映らずにはいなかつた。自分が、命を賭してまで得た女が、わずか五両か十両の^{たいまい}瑠瑠のために、女性の優しさのすべてを捨てて、死骸に付く狼のように、殺された女の死骸を慕うて駆けて行くのを見ると、市九郎は、もうこの罪悪の^{すみか}棲家に、この女と一緒に一刻もいたたまれなくなつた。そう考え出すと、自分の今までに犯した悪事がいちいち^{よみがえ}蘇つて自分の心を食い割いた。絞め殺した女の瞳や、血みどろになつた^{まゆしようにん}繭商人の呻き声や、

一太刀浴せかけた白髪の老人の悲鳴などが、一団になって市九郎の良心を襲うてきた。彼は、一刻も早く自分の過去から逃れたかった。彼は、自分自身からさえも、逃れたかった。まして自分のすべての罪悪の萌芽であつた女から、極力逃れたかつた。彼は、決然として立ち上つた。彼は、二、三枚の衣類を風呂敷に包んだ。さつきの男から盗つた胴巻を、当座の路用として懐ろに入れたままで、支度も整えずに、戸外に飛び出した。が、十間ばかり走り出した時、ふと自分の持っている金も、衣類も、ことごとく盗んだものであるのに気がつくつと、跳ね返されたように立ち戻つて、自分の家の上りがまち框へ、衣類と金とを、力一杯投げつけた。

彼は、お弓に会わないように、道でない道を木曾川に添うて一

散に走った。どこへ行くという当てもなかった。ただ自分の罪惡の根拠地から、一寸でも、一分でも遠いところへ逃れたかった。

三

二十里に余る道を、市九郎は、山野の別なく唯一息に馳せて、明るる日の昼下り、美濃国の大垣在の浄願寺じょうがんじに駆け込んだ。彼は、最初からこの寺を志してきたのではない。彼の遁走の中途、偶然この寺の前に出た時、彼の惑乱した懺悔の心は、ふと宗教的な光明にすが縋つてみたいという気になったのである。

浄願寺は、美濃一円真言宗の僧録であつた。市九郎は、現往げんおう

明遍大徳みょうへんだいとくの袖に縋つて、懺悔まことの真をいたした。上人しょうにんはさすがに、この極重悪人をも捨てなかつた。市九郎が有司ゆうしの下に自首しようかというのを止めて、

「重ね重ねの悪業を重ねた汝じやから、有司の手によつて身を梟きようぼくに晒され、現在の報いを自ら受くるのも一法じやが、それ

では未来永劫、焦熱地獄くげんの苦艱くげんを受けておらねばならぬぞよ。それよりも、仏道きえに帰依し、衆生しゆじょう濟度さいどのために、身命を捨てて人々を救うと共に、汝自身を救うのが肝心じや」と、教化した。

市九郎は、上人の言葉をきいて、またさらに懺悔の火に心を爛ただらせて、当座とうざに出家の志を定めた。彼は、上人の手によつて得度とくどして、了りよう海かいと法名を呼ばれ、ひたすら仏道修行に肝胆を砕い

たが、道心勇猛のために、わずか半年に足らぬ修行に、ぎようごう行業
 は氷ひようそう霜そうよりも皓きよく、朝には三密の行法を凝らし、夕には秘密
 念仏の安座を離れず、二行ぎようひんびん彬々として豁かつぜんちど然智度の心萌し、天
 晴れの知識となりすました。彼は自分の道心が定まって、もう動
 かないのを自覚すると、師の坊の許しを得て、諸人救済の大願を
 起し、諸国雲水の旅に出たのであった。

美濃の国を後にして、まず京洛の地を志した。彼は、幾人もの
 人を殺しながら、たとい僧形の姿なりとも、自分が生き永らえて
 いるのが心苦しかった。諸人のため、身を粉々に砕いて、自分の
 罪障の万分の一をも償いたいと思っていた。ことに自分が、木曾
 山中にあって、行人をなやませたことを思うと、道中の人々に対

して、償い切れぬ負担を持つているように思われた。

行住座臥にも、人のために思わぬことはなかつた。道路に難渋の人を見ると、彼は、手を引き、腰を押して、その道中を助けた。病に苦しむ老幼を負うて、数里に余る道を遠しとしなかつたこともあつた。本街道を離れた村道の橋でも、破壊されている時は、彼は自ら山に入つて、木を切り、石を運んで修繕した。道の崩れたのを見れば、土砂を運び来つて繕うた。かくして、畿内から、中国を通して、ひたすら善根を積むことに腐心したが、身に重なる罪は、空よりも高く、積む善根は土地よりも低きを思うと、彼は今更に、半生の悪業の深きを悲しんだ。市九郎は、些細ささいな善根によつて、自分の極悪が償いきれぬことを知つて、心を暗うし

た。逆旅げきりよの寢覚めにはかかる頼母たのもしからぬ報償をしながら、な
 お生を貪っていることが、はなはだ腑甲斐ないように思われて、
 自ら殺したいと思つたことさえあつた。が、そのたびごとに、不
 退転の勇を翻し、諸人救済の大業をなすべき機縁のいたらんこと
 を祈念した。

享保きやうほう九年の秋であつた。彼は、赤間ヶ関から小倉に渡り、
 豊前の国、宇佐八幡宮を拝し、山国川やまくにがわをさかのぼつて耆闍崛きしやくつせ
 山羅漢寺んらかんじに詣でんものと、四日市から南に赤土の茫々たる野原
 を過ぎ、道を山国川の溪谷に添うて、辿つた。

筑紫の秋は、駅路の宿りとまごとに更けて、雑木の森には樫赤はじく爛ただ
 れ、野には稲黄色く稔り、農家の軒には、この辺の名物の柿が真

紅の珠を連ねていた。

それは八月に入つて間もないある日であつた。彼は秋の朝の光の輝く、山国川の清冽せいれつな流れを右に見ながら、三口から仏坂の山道を越えて、昼近き頃樋田ひだの駅に着いた。淋しい駅で昼食ときの齋ときにありついた後、再び山国谷やまくにだにに添うて南を指した。樋田駅から出はざれると、道はまた山国川に添うて、火山岩の河岸を伝うて走つていた。

歩みがたい石高道を、市九郎は、杖を頼りに辿つていた時、ふと道のそばに、この辺の農夫であろう、四、五人の人々が罵り騒いでいるのを見た。

市九郎が近づくと、その中の一人は、早くも市九郎の姿を見つ

けて、

「これは、よいところへ来られた。非業の死を遂げた、哀れな亡者じゃ。通りかかれた縁に、一遍の回向えしやうをして下され」と、いった。

非業の死だときいた時、ひようぞく 剽賊えうぞく のためにあやめられた旅人の死骸ではあるまいかと思うて、市九郎は過去の悪業を思い起して、刹那に湧く悔恨の心に、両脚の竦すくむのおぼえた。

「見れば水死人のようじゃが、ところどころ皮肉の破れているのは、いかがした子細じゃ」と、市九郎は、恐る恐るきいた。

「御出家は、旅の人と見えてご存じあるまいが、この川を半町も上れば、鎖渡しという難所がある。山国谷第一の切所きりしよで、南北

往来の人馬が、ことごとく難儀するところじゃが、この男はこの川上柿坂郷に住んでいる馬子まごじゃが、今朝鎖渡しの中途で、馬が狂うたため、五丈に近いところを真つ逆様に落ちて、見られる通りの無残な最期じゃ」と、その中の一人がいった。

「鎖渡しと申せば、かねがね難所とは聞いていたが、かようなあわれを見ることは、たびたびござるのか」と、市九郎は、死骸を見守りながら、打ちしめつけてきた。

「一年に三、四人、多ければ十人も、思わぬ憂き目を見ることがある。無双の難所ゆえに、風雨に棧かけはしが朽ちても、修繕も思うにまかせぬのじゃ」と、答えながら、百姓たちは死骸の始末にかかつていた。

市九郎は、この不幸な遭難者に一遍の経を読むと、足を早めてその鎖渡しへと急いだ。

そこまでは、もう一町もなかった。見ると、川の左に聳える荒削りされたような山が、山国川に臨むところで、十丈に近い絶壁に切り立たれて、そこに灰白色のぎざぎざした壁ひだの多い肌を露出しているのであった。山国川の水は、その絶壁に吸い寄せられたように、ここに慕い寄って、絶壁の裾を洗いながら、濃緑の色を湛えて、渦巻いている。

里人らが、鎖渡しといったのはこれだろうと、彼は思った。道は、その絶壁に絶たれ、その絶壁の中腹を、松、杉などの丸太を鎖で連ねた栈道が、危げに伝っている。かよわい婦女子でなくと

も、俯して五丈に余る水面を見、仰いで頭を圧する十丈に近い絶壁を見る時は、魂消え、心戦くも理りおのの ことわであつた。

市九郎は、岩壁に縋りながら、戦く足を踏み締めて、ようやく渡り終つてその絶壁を振り向いた刹那、彼の心にはとつさに大誓願が、勃然として萌きんした。

積むべき贖しよくざい罪のあまりに小さかつた彼は、自分が精進勇猛の氣を試すべき難業にあうことを祈つていた。今目前に行人が艱難し、一年に十に近い人の命を奪う難所を見た時、彼は、自分の身命を捨ててこの難所を除こうという思いつきが旺然として起つたのも無理ではなかつた。二百余間に余る絶壁を掘ほりつらぬ貫貫いて道を通じようという、不敵な誓願が、彼の心に浮かんできたのであ

る。

市九郎は、自分が求め歩いたものが、ようやくここで見つかったと思つた。一年に十人を救えば、十年には百人、百年、千年と経つうちには、千万の人の命を救うことができると思つたのである。

こう決心すると、彼は、一途に実行に着手した。その日から、羅漢寺の宿坊とまに宿りながら、山国川に添うた村々を勧化かんげして、隧ず道いどう開鑿かいさくの大業の寄進を求めた。

が、何人なんびともこの風来僧の言葉に、耳を傾ける者はなかつた。

「三町をも超える大盤石を掘貫こうという風狂人ふうきようじんじゃ、はははは」と、嗤わらうものは、まだよかつた。「大騙りおおかたじゃ。針のみ

ぞから天を覗くようなことを言い前にして、金を集めようという、大騙りじや」と、中には市九郎の勸説かんぜいに、迫害を加うる者さえあつた。

市九郎は、十日の間、徒らな勸進に努めたが、何なんびと人もが耳を傾けぬのを知ると、奮然として、独力、この大業に当ることを決心した。彼は、石工の持つ槌のと鑿のみとを手に入れて、この大絶壁の一端に立つた。それは、一個の力リカチュアであつた。削り落しやうしい火山岩であるとはいへ、川を圧して聳え立つ蜿蜒えんえんたる大絶壁を、市九郎は、己一人の力で掘貫こうとするのであつた。

「とうとう気が狂つた！」と、行人は、市九郎の姿を指しながら嗤つた。

が、市九郎は屈しなかつた。山国川の清流に沐浴して、觀世音菩薩を祈りながら、渾身の力を籠めて第一の槌を下した。

それに応じて、ただ二、三片の碎片が、飛び散つたばかりであつた。が、再び力を籠めて第二の槌を下した。更に二、三片の小塊が、巨大なる無限大の大塊から、分離したばかりであつた。第三、第四、第五と、市九郎は懸命に槌を下した。空腹を感じれば、近郷を托鉢し、腹満つれば絶壁に向つて槌を下した。懈怠けたいの心を生ずれば、只真言を唱えて、勇猛の心を振り起した。一日、二日、三日、市九郎の努力は間断なく続いた。旅人は、そのそばを通るたびに、嘲笑の声を送つた。が、市九郎の心は、そのために須臾しゆゆも撓たゆむことはなかつた。嗤しし笑しょうの声を聞けば、彼はさらに槌を持

つ手に力を籠めた。

やがて、市九郎は、雨露を凌ぐしのために、絶壁に近く木小屋を立
 てた。朝は、山国川の流れが星の光を写す頃から起き出で、夕は
 瀬鳴せなりの音が静寂の天地に澄みかえる頃までも、止めなかつた。が、
 行路の人々は、なお嗤笑の言葉を止めなかつた。

「身のほどを知らぬたわけじゃ」と、市九郎の努力を眼中におか
 なかつた。

が、市九郎は一心不乱に槌を振つた。槌を振つていさえすれば、
 彼の心には何の雑念も起らなかつた。人を殺した悔恨も、そこに
 は無かつた。極楽に生れようという、欣求ごんぐもなかつた。ただそこ
 に、晴々した精進の心があるばかりであつた。彼は出家して以来、

夜ごとの寝覚めに、身を苦しめた自分の悪業の記憶が、日に薄らいでいくのを感じた。彼はますます勇猛の心を振り起して、ひたすら専念に槌を振った。

新しい年が来た。春が来て、夏が来て、早くも一年が経った。

市九郎の努力は、空しくはなかった。大絶壁の一端に、深さ一丈に近い洞窟が穿たれて^{うが}いた。それは、ほんの小さい洞窟ではあつたが、市九郎の強い意志は、最初の爪痕^{そうこん}を明らかに止めていた。が、近郷の人々はまた市九郎を嗤った。

「あれ見られい！ 狂人坊主が、あれだけ掘りおつた。一年の間、もがいて、たったあれだけじゃ……」と、嗤った。が、市九郎は自分の掘り穿った穴を見ると、涙の出るほど嬉しかった。それは

いかに浅くとも、自分が精進の力の如^{によしつ}実に現れているものに、相違なかつた。市九郎は年を重ねて、また更に振り立つた。夜は^{によほう}如法の闇に、昼もなお薄暗い洞窟のうちに端座して、ただ右の腕のみを、狂気のごとくに振っていた。市九郎にとって、右の腕を振ることのみが、彼の宗教的生活のすべてになつてしまつた。

洞窟の外には、日が輝き月が照り、雨が降り嵐が荒^{すき}んだ。が、洞窟の中には、間断なき槌の音のみがあつた。

二年の終わりにも、里人はなお嗤笑を止めなかつた。が、それはもう、声にまでは出てこなかつた。ただ、市九郎の姿を見た後、顔を見合せて、互いに嗤い合うだけであつた。が、更に一年経つた。市九郎の槌の音は山国川の水声と同じく、不斷に響いていた。

村の人たちは、もうなんともいわなかった。彼らが嗤笑の表情は、いつの間にか驚異のそれに変っていた。市九郎は梳くしけずらざれば、頭髪はいつの間にか伸びて双肩を覆い、浴ゆあみせざれば、垢づきて人間とも見えなかった。が、彼は自分が掘り穿った洞窟のうちに、獣のごとく蠢うごめきながら、狂気のごとくその槌を振いつづけていたのである。

里人の驚異は、いつの間にか同情に変わっていた。市九郎がしばしの暇を窃ぬすんで、托鉢の行脚に出かけようとすると、洞窟の出口に、思いがけなく一椀の齋ときを見出すことが多くなった。市九郎はそのために、托鉢に費やすべき時間を、更に絶壁に向うことができた。

四年目の終りが来た。市九郎の掘り穿った洞窟は、もはや五丈の深さに達していた。が、その三町を超ゆる絶壁に比ぶれば、そこになお、亡^{ぼうよう}羊の嘆があつた。里人は市九郎の熱心に驚いたものの、いまだ、かくばかり見えすいた徒労に合力するものは、一人もなかつた。市九郎は、ただ独りその努力を続けねばならなかつた。が、もう掘り穿つ仕事において、三昧に入った市九郎は、ただ槌を振うほかは何の存念もなかつた。ただ土鼠^{もぐら}のように、命のある限り、掘り穿つていくほかには、何の他念もなかつた。彼はただ一人拮^{きつ}々として掘り進んだ。洞窟の外には春去つて秋来り、四時の風物に移り変つたが、洞窟の中には不断の槌の音のみが響いた。

「可哀そうな坊様じゃ。ものに狂ったとみえ、あの大盤石を穿つていくわ。十の一も穿ち得ないで、おのれが命を終ろうものを」と、行路の人々は、市九郎の空しい努力を、悲しみ始めた。が、一年経ち二年経ち、ちようど九年目の終りに、穴の入口より奥まで二十二間を計るまでに、掘り穿った。

ひだのこう
樋田郷

の里人は、初めて市九郎の事業の可能性に気がついた。一人の痩せた乞食僧が、九年の力でこれまで掘り穿ち得るものならば、人を増し歳月を重ねたならば、この大絶壁を穿ち貫くことも、必ずしも不思議なことではないという考えが、里人らの胸の中に銘ぜられてきた。九年前、市九郎の勧進をこぞって斥けた山国川に添う七郷の里人は、今度は自発的に開鑿かいさくの寄進に付いた。

数人の石工が市九郎の事業を援けるために雇われた。もう、市九郎は孤独ではなかつた。岩壁に下す多数の槌の音は、勇ましく賑やかに、洞窟の中から、もれ始めた。

が、翌年になつて、里人たちが、工事の進み方を測つた時、それがまだ絶壁の四分の一にも達していないのを発見すると、里人たちは再び落胆疑惑の声をもらした。

「人を増しても、とても成就是せぬことじゃ。あたら、了海どのたぶらに騙かされて要らぬ物入りをした」と、彼らのはかどらぬ工事に、いつの間にか倦ききつておつた。市九郎は、また独り取り残されねばならなかつた。彼は、自分のそばに槌を振る者が、一人減り二人減り、ついには一人もいなくなつたのに気がついた。が、彼

は決して去る者を追わなかった。黙々として、自分一人その槌を振り続けたのみである。

里人の注意は、まったく市九郎の身边から離れてしまった。ことに洞窟が、深く穿たれば穿たれるほど、その奥深く槌を振う市九郎の姿は、行人の目から遠ざかっていった。人々は、闇のうちに閉された洞窟の中を透し見ながら、

「了海さんは、まだやっているのかなあ」と、疑った。が、そうした注意も、しまいにはだんだん薄れてしまつて、市九郎の存在は、里人の念頭からしばしば消失せんとした。が、市九郎の存在が、里人に対して没交渉であるがごとく、里人の存在もまた市九郎に没交渉であつた。彼にはただ、眼前の大岩壁のみが存在する

ばかりであつた。

しかし、市九郎は、洞窟の中に端座してからもはや十年にも余る間、暗澹たる冷たい石の上に座り続けていたために、顔は色蒼ざめ双の目が窪んで、肉は落ち骨あらわれ、この世に生ける人も見えなかつた。が、市九郎の心には不退転の勇猛心がしきりに燃え盛つて、ただ一念に穿ち進むほかは、何物もなかつた。一分でも一寸でも、岸壁の削り取られるごとに、彼は歓喜の声を揚げた。

市九郎は、ただ一人取り残されたままに、また三年を経た。すると、里人たちの注意は、再び市九郎の上に降りかけていた。彼らが、ほんの好奇心から、洞窟の深さを測つてみると、全長六十

五間、川に面する岩壁には、採光の窓が一つ穿たれ、もはや、この大岩壁の三分の一は、主として市九郎の瘡腕やせうでによつて、貫かれていることが分かつた。

彼らは、再び驚異の目を見開いた。彼らは、過去の無知を恥じた。市九郎に対する尊崇の心は、再び彼らの心に復活した。やがて、寄進された十人に近い石工の槌の音が、再び市九郎のそれに和した。

また一年経つた。一年の月日が経つうちに、里人たちは、いつかしら目先の遠い出費を、悔い始めていた。

寄進の人夫は、いつの間にか、一人減り二人減つて、おしまひには、市九郎の槌の音のみが、洞窟の闇を、打ち震わしていた。

が、そばに人がいても、いなくても、市九郎の槌の力は変らなかつた。彼は、ただ機械のごとく、渾身の力を入れて槌を挙げ、渾身の力をもつてこれを振り降ろした。彼は、自分の一身をさえ忘れていた。主を殺したことも、剽賊を働いたことも、人を殺したことも、すべては彼の記憶のほかには薄れてしまつていた。

一年経ち、二年経つた。一念の動くところ、彼の瘠せた腕は、鉄のごとく屈しなかつた。ちようど、十八年目の終りであつた。彼は、いつの間にか、岩壁の二分の一を穿つていた。

里人は、この恐ろしき奇跡を見ると、もはや市九郎の仕事を、少しも疑わなかつた。彼らは、前二回の懈怠けたいを心から恥じ、七郷の人々合力の誠を尽くし、こぞつて市九郎を援け始めた。その年、

中津藩の郡奉行が巡視して、市九郎に対して、奇特の言葉を下した。近郷近在から、三十人に近い石工があつめられた。工事は、枯葉を焼く火のように進んだ。

人々は、衰残の姿いたいたしい市九郎に、

「もはや、そなたは石工共の統領たばねをなさりませ。自ら槌を振うには及びませぬ」と、勧めたが、市九郎は頑として応じなかつた。

彼は、たおるれば槌を握つたままと、思っているらしかつた。彼は、三十の石工がそばに働くのも知らぬように、寝食を忘れ、懸命の力を尽くすこと、少しも前と変らなかつた。

が、人々が市九郎に休息を勧めたのも、無理ではなかつた。二十年にも近い間、日の光も射さぬ岩壁の奥深く、座り続けたため

であろう。彼の両脚は長い端座に傷み、いつの間にか屈伸の自在を欠いていた。彼は、わずかの歩行にも杖に縋すがらねばならなかった。

その上、長い間、闇に座して、日光を見なかったためでもある。また不断に、彼の身边に飛び散る砕けた石の碎片かけらが、その目を傷つけたためでもある。彼の両目は、朦朧として光を失い、もののあいろもわきまえかねるようになっていた。

さすがに、不退転の市九郎も、身に迫る老衰を痛む心はあった。身命に対する執着はなかったけれど、中道にしてたおれることを、何よりも無念と思つたからであつた。

「もう二年の辛抱じゃ」と、彼は心のうちに叫んで、身の老衰を

忘れようと、懸命に槌を振うのであった。

おか 冒しがたき大自然の威厳を示して、市九郎の前に立ち塞がっていた岩壁は、いつの間にか衰残の乞食僧一人の腕に貫かれて、その中腹を穿つ洞窟は、命ある者のごとく、一路その核心を貫かんとしていたのであった。

四

市九郎の健康は、過度の疲労によつて、痛ましく傷つけられていたが、彼にとつて、それよりももっと恐ろしい敵が、彼の生命を狙っているのであった。

市九郎のために非業の横死を遂げた中川三郎兵衛は、家臣のために殺害されたため、家事不取締とあつて、家は取り潰され、その時三歳であつた一子実之助は、縁者のために養ひ育てられることになつた。

実之助は、十三になつた時、初めて自分の父が非業の死を遂げたことを聞いた。ことに、相手が対等の士人でなくして、自分の家に養われた奴僕ぬぼくであることを知ると、少年の心は、無念の憤りいきどおに燃えた。彼は即座に復讐の一義を、肝深く銘じた。彼は、馳せて柳生やぎゅうの道場に入った。十九の年に、免許皆伝を許されると、彼はただちに報復の旅に上つたのである。もし、首尾よく本懐を

達して帰れば、一家再興の肝煎りもしようという、親類一同の激励の言葉に送られながら。

実之助は、馴れぬ旅路に、多くの艱難を苦しみながら、諸国を遍歴して、ひたすら敵市九郎の所在を求めた。市九郎をただ一度さえ見たこともない実之助にとっては、それは雲をつかむがごときおぼつかなき搜索であった。五畿内、東海、東山、山陰、山陽、北陸、南海と、彼は漂泊の旅路に年を送り年を迎え、二十七年まで空虚な遍歴の旅を続けた。敵に対する怨みも憤りも、旅路の艱難に消磨せんとすることたびたびであった。が、非業に殫れた父の無念を思い、中川家再興の重任を考えると、奮然と志を奮い起すのであった。

江戸を立つてからちようど九年目の春を、彼は福岡の城下に迎えた。本土を空しく尋ね歩いた後に、辺陲へんすいの九州をも探つてみる気になつたのである。

福岡の城下から中津の城下に移つた彼は、二月に入つた一日、宇佐八幡宮に賽さいして、本懐の一日も早く達せられんことを祈念した。実之助は、参拝を終えてから境内の茶店に憩うた。その時に、ふと彼はそばの百姓てい体の男が、居合せた参詣客に、

「その御出家は、元は江戸から来たお人じゃげな。若い時に人を殺したのを懺悔して、諸人済度の大願を起したそうじゃが、今いうた樋田の剗貫こかんは、この御出家一人の力でできたものじゃ」と語るのを耳にした。

この話を聞いた実之助は、九年この方いまだ感じなかつたような興味を覚えた。彼はやや急せき込みながら、「率そつじ爾ながら、少々ものを尋ねるが、その出家と申すは、年の頃はどれぐらいじや」と、きいた。その男は、自分の談話が武士の注意をひいたことを、光栄であると思つたらしく、

「さようでございますな。私はその御出家を拝んだことはございませぬが、人の噂では、もう六十に近いと申します」

「丈たけは高いか、低いか」と、実之助はたたみかけてきいた。

「それもしかとは、分かりませぬ。何様、洞窟の奥深くいられるゆえ、しかとは分かりませぬ」

「その者の俗名は、なんと申したか存ぜぬか」

「それも、とんと分かりませんが、お生れは越後の柏崎で、若い時に江戸へ出られたそうでござります」と、百姓は答えた。

ここまでできた実之助は、躍り上つて欣よろこんだ。彼が、江戸を立つ時に、親類の一人は、敵かたきは越後柏崎の生れゆえ、故郷へ立ち回るかも計りがたい、越後は一ひと入心しおを入れて探索せよという、注意を受けていたのであった。

実之助は、これぞ正しく宇佐八幡宮の神託なりと勇み立った。

彼はその老僧の名と、山国谷に向う道をきくと、もはや八つ刻を過ぎていたにもかかわらず、必死の力を双脚に籠めて、敵あの所在りかへと急いだ。その日の初更近く、樋田村に着いた実之助は、ただちに洞窟へ立ち向おうと思つたが、焦あせつてはならぬと思ひ返して、

その夜は樋田駅の宿に焦慮の一夜を明かすと、翌日は早く起き出でて、軽装して樋田の刳貫へと向つた。

刳貫の入口に着いた時、彼はそこに、石の碎片かけらを運び出している石工に尋ねた。

「この洞窟の中に、了海といわるる御出家がおわすそうじやが、それに相違ないか」

「おわさないでなんとしよう。了海様は、この洞ほくらの主も同様な方じや。はははは」と、石工は心なげに笑つた。

実之助は、本懐を達すること、はや眼前にありと、欣び勇んだ。が、彼はあわててはならぬと思つた。

「して、出入り口はここ一カ所か」と、きいた。敵に逃げられて

はならぬと思つたからである。

「それは知れたことじゃ。向うへ口を開けるために、了海様は塗炭の苦しみをなさっているのじゃ」と、石工が答えた。

実之助は、多年の怨敵が、囊中の鼠のごとく、目前に置かれてあるのを欣んだ。たとい、その下に使わるる石工が幾人いようとも、切り殺すに何の造作もあるべきと、勇み立った。

「其方そちに少し頼みがある。了海どのに御意得たため、遙々と尋ねて参つた者じゃと、伝えてくれ」と、いった。石工が、洞窟の中へはいつた後で、実之助は一刀の目くぎを湿した。彼は、心のうちで、生来初めてめぐりあふ敵の容貌を想像した。洞門の開鑿を統領しているといえ、五十は過ぎているとはいえ、筋骨たく

ましき男であろう。ことに若^{じゃく}年^{ねん}の頃には、兵法に疎^{うと}からざりしというのであるから、ゆめ油断はならぬと思つていた。

が、しばらくして実之助の面前へと、洞門から出てきた一人の乞食僧があつた。それは、出てくるというよりも、墓^{がま}のごとく這い出てきたという方が、適当であつた。それは、人間というよりも、むしろ、人間の残骸というべきであつた。肉ことごとく落ちて骨あらわれ、脚の関節以下はとどころただれて、長く正視するに堪えなかつた。破れた法衣によつて、僧形とは知れるものの、頭髮は長く伸びて皺だらけの額をおおつていた。老僧は、灰色をなした目をしばたたきながら、実之助を見上げて、

「老眼衰えはてまして、いずれの方ともわきまえかねます」と、

いった。

実之助の、極度にまで、張り詰めてきた心は、この老僧を一目見た刹那たじたじとなつてしまつていた。彼は、心の底から憎悪を感じ得るような悪僧を欲していた。しかるに彼の前には、人間とも死骸ともつかぬ、半死の老僧が蹲つていたのである。実之助は、失望し始めた自分の心を励まして、

「そのもとが、了海といわるるか」と、意気込んできいた。

「いかにも、さようでござります。してそのもとは」と、老僧は訝いぶかしげに実之助を見上げた。

「了海とやら、いかに僧形に身をやつすとも、よも忘れはいたすまい。汝、市九郎と呼ばれし若年の砌みぎり、主人中川三郎兵衛を打つ

て立ち退いた覚えがある。某は、三郎兵衛の一子実之助と申すものじゃ。もはや、逃れぬところと覚悟せよ」

と、実之助の言葉は、あくまで落着いていたが、そこに一步も、許すまじき厳正さがあつた。

が、市九郎は実之助の言葉をきいて、少しもおどろかなかつた。

「いかさま、中川様の御子息、実之助様か。いやお父上を打つて立ち退いた者、この了海に相違ござりませぬ」と、彼は自分を敵と狙う者に会つたというよりも、旧主の遺児わすれごに会つた親しきをもつて答えたが、実之助は、市九郎の声音こわねに欺かれてはならぬと思つた。

「主を打つて立ち退いた非道の汝を討つために、十年に近い年月

を艱難のうちに過したわ。ここで会うからは、もはや逃れぬところと尋常に勝負せよ」と、いった。

市九郎は、少しも悪怯わるびれなかつた。もはや期年のうちに成就すべき大願を見果てずして死ぬことが、やや悲しまれたが、それもおのれが悪業の報むくいであると思うと、彼は死すべき心を定めた。

「実之助様、いざお切りなされい。おきき及びもなされたろうが、これは了海めが、罪亡しに掘り穿とうと存じた洞門でござるが、十九年の歳月を費やして、九分までは竣工いたした。了海、身を果つとも、もはや年を重ねずして成り申そう。御身の手にかかり、この洞門の入口に血を流して人柱となり申さば、はや思い残すこともござりませぬ」と、いいながら、彼は見えぬ目をしばたたい

たのである。

実之助は、この半死の老僧に接していると、親の敵かたきに対して懐いていた憎しみが、いつの間にか、消え失せているのを覚えた。敵は、父を殺した罪の懺悔に、身心を粉に砕いて、半生を苦しみ抜いている。しかも、自分が一度名乗りかけると、唯々いとして命を捨てようとしているのである。かかる半死の老僧の命を取るこゝとが、なんの復讐であるかと、実之助は考えたのである。が、しかしこの敵を打たざる限りは、多年の放浪を切り上げて、江戸へ帰るべきよすがはなかつた。まして家名の再興などは、思いも及ばぬことであつたのである。実之助は、憎悪よりも、むしろ打算の心からこの老僧の命を縮めようかと思つた。が、激しい燃ゆる

がごとき憎悪を感じずして、打算から人間を殺すことは、実之助にとつて忍びがたいことであつた。彼は、消えかかろうとする憎悪の心を励ましながら、打ち甲斐なき敵を打とうとしたのである。その時であつた。洞窟の中から走り出て来た五、六人の石工は、市九郎の危急を見ると、挺身して彼を庇かばいながら「了海様をなんとするのじゃ」と、実之助を咎めた。彼らの面には、仕儀によつては許すまじき色がありありと見えた。

「子細あつて、その老僧を敵と狙い、端なくも今日めぐりおうて、本懐を達するものじゃ。妨げいたすと、余人なりとも容赦はいたさぬぞ」と、実之助は凜然といった。

が、そのうちに、石工の数は増え、行路の人々が幾人となく立

ち止つて、彼らは実之助を取り巻きながら、市九郎の身体に指の一本も触れさせまいと、銘々にいきまき始めた。

「敵を討つ討たぬなどは、それはまだ世にあるうちのことじゃ。

見らるる通り、了海どのは、染衣せんいち薙はつの身である上に、この山国谷七郷の者にとつては、持地菩薩の再来とも仰がれる方じゃ」と、そのうちのある者は、実之助の敵討ちを、叶わぬ非望であるかのようにいい張つた。

が、こう周囲の者から妨げられると、実之助の敵に対する怒りはいつの間にか蘇よみがえつていた。彼は武士の意地として、手をこまねいて立ち去るべきではなかつた。

「たとい沙門しゃもんの身なりとも、主殺しの大罪は免れぬぞ。親の敵

を討つ者を妨げいたす者は、一人も容赦はない」と、実之助は一刀の鞘を払った。実之助を囲う群衆も、皆ことごとく身構えた。すると、その時、市九郎はしわがれた声を張り上げた。

「皆の衆、お控えなされい。了海、討たるべき覚え十分ござる。この洞門を穿つことも、ただその罪滅ぼしのためじゃ。今かかる孝子のお手にかかり、半死の身を終ること、了海が一期ごの願いじゃ。皆の衆妨げ無用じゃ」

こういいながら市九郎は、身を挺して、実之助のそばにいざり寄ろうとした。かねがね、市九郎の強剛なる意志を知りぬいていゝる周囲の人々は、彼の決心をひるがえ翻すべき由もないのを知った。市九郎の命、ここに終るかと思われた。その時、石工の統領が、実之

助の前に進み出でながら、

「御武家様も、おきき及びでもござろうが、この刳貫は了海様、一生の大誓願にて、二十年に近き御辛苦に身心を砕かれたのじや。いかに、御自身の悪業とはいえ、大願成就を目前に置きながら、お果てなさること、いかばかり無念であろう。我らのこぞつてのお願いは、長くとは申さぬ、この刳貫の通じ申す間、了海様のお命を、我らに預けては下さらぬか。刳貫さえ通じた節は、即座に了海様を存分になさりませ」と、彼は誠を表して哀願した。群衆は口々に、

「ことわりじや、ことわりじや」と、賛成した。

実之助も、そういわれてみると、その哀願をきかぬわけにはい

かなかつた。今ここで敵を討とうとして、群衆の妨害を受けて不覚を取るよりも、剗通の竣工を待ったならば、今でさえ自ら進んで討たれようという市九郎が、義理に感じて首を授けるのは、必定であると思つた。またそうした打算から離れても、敵とはいいながらこの老僧の大誓願を遂げさしてやるのも、決して不快なことではなかつた。実之助は、市九郎と群衆とを等分に見ながら、「了海の僧形にめでてその願い許して取らそう。束つがえた言葉は忘れまいぞ」と、いつた。

「念もないことでござる。一分の穴でも、一寸の穴でも、この剗貫が向う側へ通じた節は、その場を去らず了海様を討たさせ申そう。それまではゆるゆると、この辺りに御滞在なされませ」と、

石工の棟梁は、穏やかな口調でいった。

市九郎は、この紛擾ふんじょうが無事に解決が付くと、それによつて徒費した時間がいかにも惜しまれるように、にじりながら洞窟の中へ入つていった。

実之助は、大切の場合に思わぬ邪魔が入つて、目的が達し得なかつたことを憤つた。彼はいかんともしがたい鬱憤を抑えながら、石工の一人に案内せられて、木小屋のうちへ入つた。自分一人になつて考えると、敵を目前に置きながら、討ち得なかつた自分の腑甲斐なさを、無念と思わずにはいられなかつた。彼の心はいつの間にか苛いらだたしい憤りでいっぱいになつていた。彼は、もう剗貫の竣成を待つといつたような、敵に対する緩ゆるかな心をまつたく

失つてしまった。彼は今宵にも洞窟の中へ忍び入つて、市九郎を討つて立ち退こうという決心の臍ほそを固めた。が、実之助が市九郎の張り番をしているように、石工たちは実之助を見張つていた。

最初の二、三日を、心にもなく無為に過したが、ちようど五日目の晩であつた。毎夜のことなので、石工たちも警戒の目を緩めたと見え、丑うしに近い頃に何なんびと人もいぎたない眠りに入つていた。

実之助は、今宵こそと思ひ立つた。彼は、がばと起き上ると、枕元の一刀を引き寄せて、静かに木小屋の外に出た。それは早春の夜の月が冴えた晩であつた。山国川の水は月光の下に蒼く渦巻きながら流れていた。が、周囲の風物には目もくれず、実之助は、足を忍ばせてひそかに洞門に近づいた。削り取つた石塊が、とこ

ろどころに散らばつて、歩を運ぶたびごとに足を痛めた。

洞窟の中は、入口から来る月光と、ところどころに剝くり明けられた窓から射し入る月光とで、ところどころほの白く光っているばかりであつた。彼は右方の岩壁を手探たぐり手探り奥へ奥へと進んだ。

入口から、二町ばかり進んだ頃、ふと彼は洞窟の底から、クワツクワツと間を置いて響いてくる音を耳にした。彼は最初それがなんであるか分からなかつた。が、一步進むに従つて、その音は拡大していつて、おしまいには洞窟の中の夜の寂じやく静じようのうちに、こだまするまでになつた。それは、明らかに岩壁に向つて鉄槌を下す音に相違なかつた。実之助は、その悲壮な、凄みを帯びた音

によつて、自分の胸が激しく打たれるのを感じた。奥に近づくに從つて、玉を砕くような鋭い音は、洞窟の周囲にこだまして、実之助の聴覚を、猛然と襲つてくるのであつた。彼は、この音をたよりに這いながら近づいていった。この槌の音の主こそ、敵了海に相違あるまいと思つた。ひそかに一刀の鯉こいぐち口を湿しながら、息を潜めて寄り添うた。その時、ふと彼は槌の音の間々に囁ささやくがごとく、うめくがごとく、了海が経文を誦じゆする声をきいたのである。

そのしわがれた悲壯な声が、水を浴びせるように実之助に徹してきた。深夜、人去り、草木眠っている中に、ただ暗中に端座して鉄槌を振っている了海の姿が、墨のごとき闇にあつてなお、実

之助の心眼に、ありありとして映つてきた。それは、もはや人間の心ではなかった。喜怒哀樂の情の上にあつて、ただ鉄槌を振っている勇猛精進の菩薩心であつた。実之助は、握りしめた太刀の柄が、いつの間にか緩んでいるのを覺えた。彼はふと、われに返つた。すでに仏心を得て、衆生のために、碎身の苦を嘗めている高德の聖ひじりに対し、深夜の闇に乗じて、ひはぎのごとく、獣のごとく、瞋恚しんいの劍を抜きそばめている自分を顧かえりみると、彼は強い戦慄が身体を伝うて流れるのを感じた。

洞窟を揺がせるその力強い槌の音と、悲壮な念仏の声とは、実之助の心を散々に打ち砕いてしまった。彼は、潔く竣成の日を待ち、その約束の果さるるのを待つよりほかはないと思つた。

実之助は、深い感激を懐きながら、洞外の月光を指し、洞窟の外に這い出たのである。

そのことがあってから間もなく、剗貫の工事に従う石工のうち、武家姿の実之助の姿が見られた。彼はもう、老僧を闇討ちにして立ち退こうというような険しい心は、少しも持っていないかった。了海が逃げも隠れもせぬことを知ると、彼は好意をもって、了海がその一生の大願を成就する日を、待つてやろうと思つてゐた。

が、それにしても、茫然と待つてゐるよりも、自分もこの大業に一臂ひの力を尽くすことによつて、いくばくかでも復讐の期日が短縮せられるはずであることを悟ると、実之助は自ら石工に伍し

て、槌を振り始めたのである。

敵と敵とが、相並んで槌を下した。実之助は、本懐を達する日の一日でも早かれと、懸命に槌を振った。了海は実之助が出現してから、一日も早く大願を成就して孝子の願いを叶えてやりた
いと思つたのであろう。彼は、また更に精進の勇を振つて、狂人のように岩壁を打ち砕いていた。

そのうちに、月が去り月が来た。実之助の心は、了海の大勇猛心に動かされて、彼自ら刳貫の大業に讐しゅうてき敵の怨みを忘れようとしがちであつた。

石工共が、昼の疲れを休めている真夜中にも、敵と敵とは相並んで、黙々として槌を振っていた。

それは、了海が樋田の剗貫に第一の槌を下してから二十一年目、
実之助が了海にめぐりあつてから一年六カ月を経た、えんきよう延享三
年九月十日の夜であつた。この夜も、石工どもはことごとく小屋
に退いて、了海と実之助のみ、終日の疲労にめげず懸命に槌を振
つていた。その夜九つに近き頃、了海が力を籠めて振り下した槌
が、朽木を打つがごとくなんの手答えもなく力余つて、槌を持つ
た右の掌が岩に当つたので、彼は「あつ」と、思わず声を上げた。
その時であつた。了海の朦朧たる老眼にも、まぎ紛れなくその槌に破
られたる小さき穴から、月の光に照らされたる山国川の姿が、あ
りありと映つたのである。了海は「おう」と、全身を震わせるよ
うな名状しがたき叫び声を上げたかと思うと、それにつづいて、

狂したかと思われるような歡喜の泣笑が、洞窟をものすごく動揺うごめかしたのである。

「実之助どの。御覽なされい。二十一年の大誓願、端なくも今宵成就いたした」

こういいながら、了海は実之助の手を取って、小さい穴から山国川の流れを見せた。その穴の真下に黒ずんだ土の見えるのは、岸に添う街道に紛れもなかった。敵と敵とは、そこに手を執り合せて、大歡喜の涙にむせんだのである。が、しばらくすると了海は身を退すきって、

「いざ、実之助殿、約束の日じや。お切りなされい。かかる法悦の真ん中に往生いたすなれば、極楽浄土に生るること、必定疑い

なしじゃ。いざお切りなされい。明日ともなれば、石工共が、妨げいたそう、いざお切りなされい」と、彼のしわがれた声が洞窟の夜の空気に響いた。が、実之助は、了海の前に手を拱こまねいて座つたまま、涙にむせんでゐるばかりであつた。心の底から湧き出する歡喜に泣く凋しなびた老僧を見ていると、彼を敵として殺すことなどは、思い及ばぬことであつた。敵を討つなどという心よりも、このかよわい人間の双の腕かいなによつて成し遂げられた偉業に対する驚異と感激の心とで、胸がいっぱいであつた。彼はいざり寄りながら、再び老僧の手をとつた。二人はそこにすべてを忘れて、感激の涙にむせび合うたのであつた。

青空文庫情報

底本：「菊池寛 短編と戯曲」文芸春秋

1988（昭和63）年3月25日第1刷発行

入力：真先芳秋

校正：伊藤祥

1999年2月1日公開

2005年10月13日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

恩讐の彼方に

菊池寛

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>